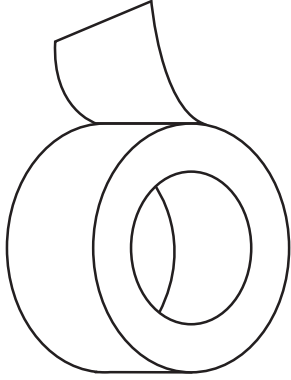


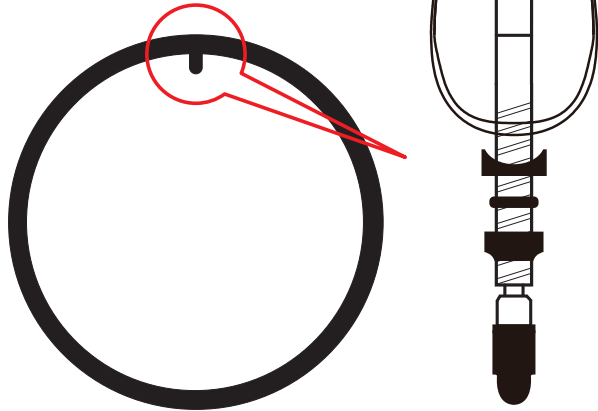
GIANT

Tubeless Tire

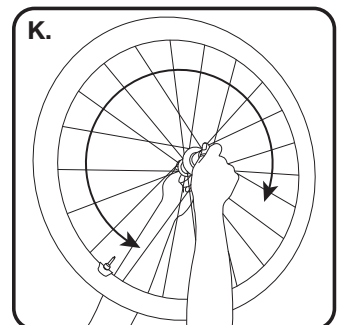
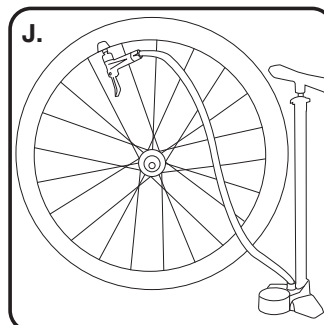
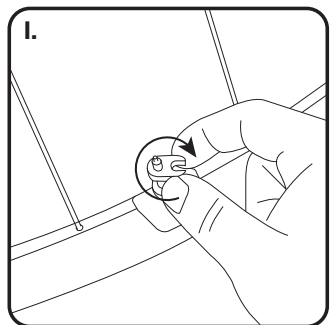
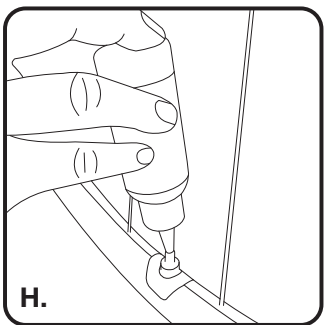
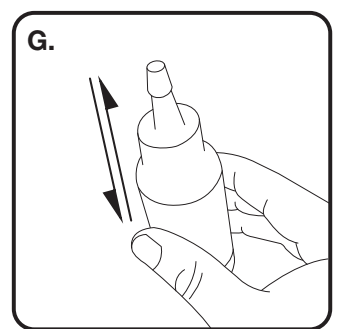
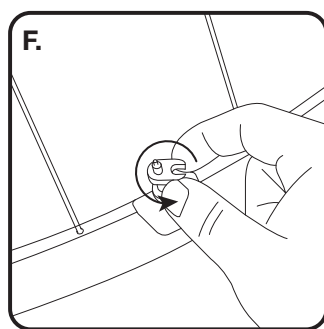
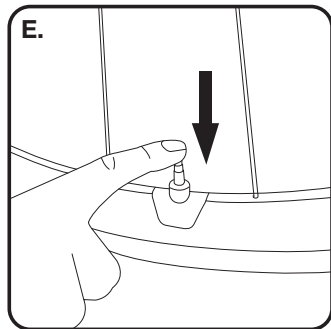
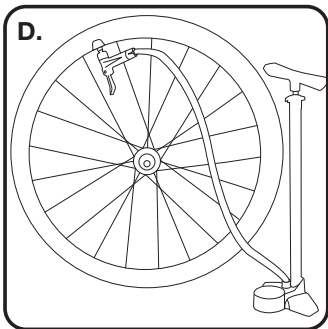
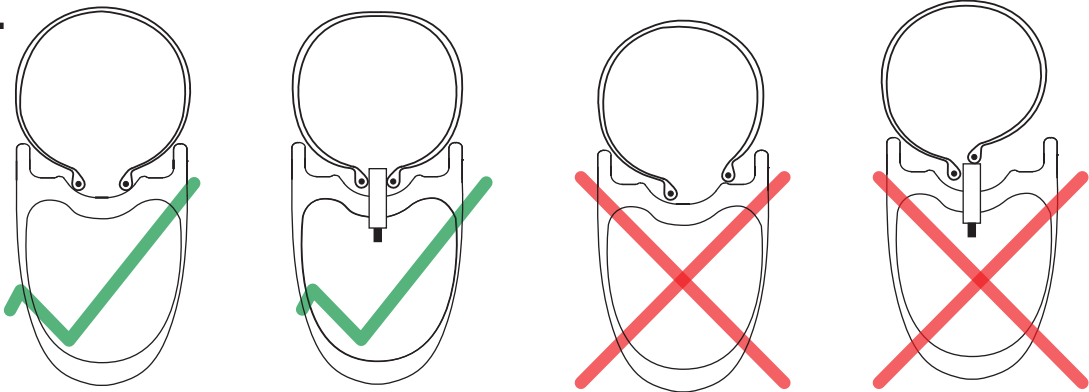
A.



B.



C.



ジャイアントのチューブレスタイヤは、タイヤの空気圧保持能力を向上させるために、ケーシング内側に特殊なコーティングを施しています。このコーティングはタイヤレバーにより傷つきやすいので、タイヤの取り付け/取り外しの際はタイヤレバーを使用しないことを推奨します。ホイールへの取り付けが困難な場合は、必ず専用に設計されたチューブレスタイヤレバーの使用してください。

また、ジャイアントのチューブレスシステムは適切な空気圧の保持のため、シーラントを使用する必要があります。

チューブレスタイヤの取り付け

1. バルブの反対側から、ホイール右側のタイヤビードをリムセンターチャンネルに落としこんでいきます。8割ほどビードが収まったら、チューブレスバルブのゴムをまたぐようにして、ビードの残りの部分を落とし込みます。(チューブレスバルブを境にリムセンターチャンネルを左右に分けた時、全ての右側ビードが、ホイール右側のリムセンターチャンネルに収まるようにします。)(C)

2. バルブの反対側から、左側のビードを左側のリムセンターチャンネルに落としていきます。ビードをバルブ部分の最後まで落とした時、左右のビードがチューブレスバルブのゴムを挟み込むようにします。(C)

3. シーラントを追加する前に、両方のビードがリムのビードフックに収まるように、タイヤを膨らませます。この時、リムまたはタイヤの最大指定空気圧を超えないように注意してください。エアを注入したらホイールを手で回し、タイヤのビードラインがホイールの全周にわたって、均等に目視できることを確認します。ビードフックに収まっていない部分がある場合は、手でタイヤサイドをこじったり、エアをゆっくりと抜いて再度膨らませ、ビードを持ち上げます。(D)

• 注1: ビードフックに収まっていない部分は、エア漏れの原因となります。上記の方法で、全てのビードをビードフックに収めてください。

• 注2: タイヤを膨らませてビードを上げる時は、一度に多くのエアを注入する必要があります。フロアポンプでビードが上がらない場合は、ジャイアントのコントロールタンク、またはコンプレッサーを使って膨らませてください。

• 注3: ジャイアントのチューブレスシステムは適切な空気圧の保持のため、シーラントを使用する必要があります。シーラントを注入する前に、乗車を開始しないでください。

4. ビードがホイール全周にわたって収まったら、ゆっくりとタイヤのエアを抜いて、ケーシング内にシーラントを追加します。この時、エアを勢い良く抜くと、ビードがリムセンターチャンネルに落ちてしまう場合があります。

5. エアを全て抜いた後で、バルブコアツールを使用しバルブコアを完全に取り外します。(F)

6. シーラントの使用前に、粒子が液体中に拡散するように容器をよく振ります。(G)

7. コアを外したバルブの開口部から、シーラントをタイヤに注入します。この時シーラントがこぼれる場合があるので、ホイールの下に保護マットを準備することをおすすめします。こぼれたシーラントはよく拭きとってください。(H)

• 注: シーラントの量については、各シーラントメーカーの推奨量に従ってください。シーラントが多過ぎるとシール性能は高くなりますが、転がり抵抗が増える可能性があります。また、シーラントが少なすぎるとエア漏れが発生する可能性があります。シーラントの推奨量はタイヤサイズに依存しますが、30~60mLです。

• 注: ジャイアント、Stan's NoTubes製のシーラント、または、Stan's NoTubes製のOEMシーラントのみを使用してください。他ブランドのシーラントは、ジャイアントのチューブレスシステムでは適合しない場合があります、保証が無効になる可能性があります。

8. シーラントを注入したら、バルブコアを再取り付けします。バルブコアツールを使用し、コアがしっかりと締まっていることを確認します。強すぎる、または弱すぎるコアの締め付けは、チューブレスシステムの気密性を損なう可能性があります。(I)

9. バルブコアの先端を反時計周りに緩めてバルブを開き、ポンプヘッドを装着します。タイヤに記載される最大指定空気圧まで膨らませます。(J)

10. エアの注入時に、シーラントまたはエアが、リムとビードの隙間から漏れる可能性があります。これに対処するために、手でホイールのハブ軸を持ち、ゆっくりホイールを回転させます。または、タイヤを両手でつかみホイール全体を左右に振ります。短時間ホイールを自転車につけて乗ることも有効ですが、その際は最小指定空気圧を必ず確認してください。上記の方法で、シーラントがケーシング内に隅々まで拡散し、エア漏れを止めることができます。(K)

11. 乗車する空気圧に調整し、ホイールをバイクに取り付けます。

12. ご不明な点がある場合は、ジャイアント正規販売店にお問い合わせください。

チューブレスタイヤの取り付けに関するFAQ

シーラントはどのように扱えばいいですか？

- ジャイアントのシーラントは、乳白色の液体です。使用前に、粒子が液体中に拡散するように十分にシーラント容器を振ってください。
- シーラントの気密性は気候や外的条件に応じて、2～6ヶ月間持続します。タイヤに注入した後は、気密性を維持するため3～4週間毎にシーラントの状態を確認してください。乾いている場合は、推奨量を再度注入します。
- 乾燥した気候、および屋外でバイクを保管する場合は、より頻繁にシーラントの補充を必要とする可能性があります。
- 保管の際はシーラントの乾燥を防ぐために、容器のふたをしっかりと締め、冷暗所に置いてください。

エアを入れてもビードが上がらず、タイヤを膨らませることができません。

- エアを注入する前に、左右のタイヤビードがリムセンターチャンネルに収まり、チューブレスバルブのゴムを挟んでいることを確認します。
- バルブコアを取り外し、バルブシステムから少量(15cc)のシーラントを追加します。これによりタイヤの滑りが良くなり、より簡単にビードを上げることができます。

タイヤを取り外す方法は？

- 最初に、タイヤのエアを完全に抜きます。タイヤサイドを手でこじって、左右のビードをリムのセンターチャンネルに完全に落とし込みます。バルブ付近の片側のビードを両手でつまんで持ち上げ、リムの外側に向かって外します。ビードの一部を外したら、リムに沿って片側ずつ残りのビードを外していきます。片側のビードが完全に外れたら、もう一方のビードも同様の方法で外します。
- タイヤレバーを使用せず、手でタイヤを外すことを推奨します。取り外しが困難でタイヤレバーを使用する必要がある場合は、必ず専用設計のチューブレスタイヤレバーを用い、ケーシング、ビードまたはリムを傷つけないように慎重に作業してください。

梱包によりタイヤビードが変形し、ビードが上がりにくいです。

- ホイールにインナーチューブを入れて取り付け、最大指定空気圧までエアを注入しタイヤを膨らませ、12時間放置します。ビードの形状を元に戻すことにつながります。

パンクは、クリンチャーおよびチューブレスシステムにおいても、完全に避けることはできません。走行中は路面の状況に注意を払い、パンクを引き起こす可能性がある異物やガラス片を避けることにより、パンクのリスクを減らすことができます。

タイヤに目視できるパンク穴は無いが、エア漏れが続く場合はどうすればいいですか？

エア漏れの原因を確認するために、次のステップに従ってください：

- チューブレスバルブの気密性に問題がないかを確認します。バルブナットの過度の締め付け、バルブコアの緩み、古いシーラントの詰まりはエア漏れの原因となります。
- シーラントが液状で、十分にケーシング内にあることを確認します。必要に応じて、更に15cc追加します。
- タイヤを取り外し、チューブレスリムテープの剥がれまたは裂けがないかを確認します。特に、スポーク穴のエッジにまでテープが貼り付けられているかを確認します。また、チューブレスバルブのゴムがセンターチャンネルに適切におさまり、バルブナットの緩み、ゴムまたは周辺のリムに損傷がないことを確認します。
- リムの亀裂、曲がり、または他の損傷がないかを確認します。

タイヤがパンクした場合、どのように修理すればいいですか？

- 最初に、パンク穴の有無を確認します。パンク穴に破片や異物がある場合は除去してください。異物を除去しないと、タイヤに更なる損傷が発生する可能性があります。
- パンク穴が大きすぎてシーラントがシールできない場合は、必要に応じてタイヤパッチをケーシング裏側に貼り付けて穴を塞ぎ、インナーチューブを取り付けます。
- シーラントがパンクした穴から吹き出し続ける場合は、パンク穴が下になる(6時の向き)ようにタイヤを回転させ、しばらく置いておきます。これにより、シーラントが穴を塞ぎやすくなります。
- パンク穴が大きすぎてシーラントがシールできない場合は、チューブレスシステムに必要な気密性が得られない場合があります。タイヤパッチで修理可能な場合でも、再度チューブレス化しての継続使用は推奨いたしません。